桃山学院大学
St. Andrew's University

和泉キャンパス　〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1-1 TEL. 0725-54-3245
あべのBDL（ビジネスデザイン・ラボ）　〒545-0011 大阪府大阪市阿倍野区昭和町3-1-57 TEL. 06-4708-3561

失敗はきらい

でも、やらなくて後悔するならやってみる。

Interview

社会学部 社会学科 2年次
丸山 菜々瀬 さん

高校の時は
目標がなかった。

だからこそ、コロナ禍でも大学を
めっちゃ使い倒して見つけてやる！

高校まで授業は受け身だったし、将来の目標もなかった。大学に入れば何か見つかるだろう…そんな気持ちで入学。大学は、想像以上に成長するための機会に溢れていた
以前、桃大と岸和田市が連携した「学生リーダープロジェクト」に参加したとき、「どうしたら岸和田市をもっと“次世代を育む街”にできるか」と、一学生の私に本気で意見を求められた。あれ？今存在する問題や、そもそも教育について知識がないと意見できないぞ…。焦った私は、関連する文献や動画を必死で探し調べた。
考えをどうまとめて相手に伝えればよいのか一人悩み、コロナ禍のせいで丁寧に指導してもらえないんだと思い込んで苛立った。どう質問したらよいかもわからないまま、思い切って先生に相談すると、親身になって「この部分はこういう社会問題の側面からも考えてごらん」とアドバイスをくださった。自分にはなかった社会学者としての観点。目からうろこだった。社会学の面白さを知り、自分から積極的に指導を求める大切さに気づけた出来事だった。

大学の学び方にびっくり！
4年間をどう生かすかは自分次第なんだ！

自分の限界を決めないようにしよう！「社会調査士」資格にも挑戦！

もっと社会のしくみを学んで、自分の視野と可能性を広げたい。コロナ禍でも可能な方法で、多くの人に関わって、難しそうと思うことにも挑戦しようと決めた。今は、聴覚障がいのある学生をサポートする「パソコンテイク※1」や、新入生の学習をサポートする「ピアインテグレーター」に取り組み中。桃大の資格取得サポートを活用して「MOS※2」も取得した。今後はゼミで「社会調査士」の資格取得に挑戦する。通学のためのバイク免許もとり、私の世界は日々広がっている。まだまだしたいことがある。桃大でどんな将来の目標を見つけられるのか、ワクワクが止まらない。

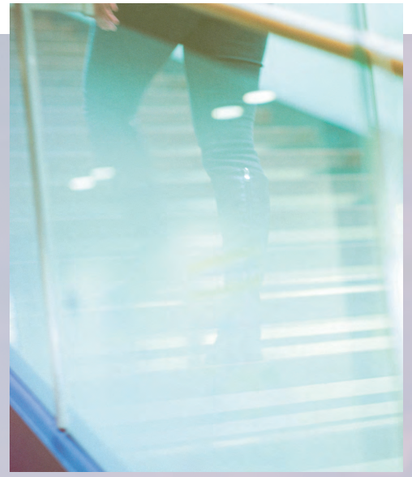
※1 授業中、先生の話している内容を要約してパソコンに入力し、講義の内容を伝えます。聴覚に障がいのある仲間の「耳」の役割をします。
※2 MOS:エクセルやワードなど、マイクロソフトオフィス製品の利用スキルを証明できる資格。

Interview

国際教養学部 英語・国際文化学科 4年次
西山 鈴華 さん

インドの大学に留学して国際支援のあり方に違和感を感じた

ああ、私は間違っていたのかもしれない。インド留学後、正義とは何なのか、悶々と向き合う日々が今も続いている。
中学生の頃、授業で「ガーナにおける児童労働」の映像を観たとき、怒りに似た衝撃を受けた。その時の気持ちはずっと消えなかった。大学に入学後、国際センター担当者にその経験を伝えると、貧困と向き合う教育現場を実際に訪れたいなら、交換留学制度でインドへ行ってみないかと勧められた。行きたい！迷いはなかった。
厳しいカースト（身分）制度が存在するインド。貧しい生活を強いられてきた子どもたちが様々なサポートを受けて学んでいる「ロッレト・デイ・スクール※1」を訪れ研修していたとき、現地のインドの友人が声をかけてきた。「日本が助けてあげないとなんて思わないで。私たちは私たちでちゃんとできている」。その言葉は、帰国後もボディブローのように効き続ける。本当に彼らはかわいそうだったのか？日本の社会や子どもたちは彼らより幸せだと言えるか？日本の国際支援の数々は、相手が本当に求めている形で実施されているだろうか？



私らしさ。

当たり前を疑える

The world is too big to stay stuck in one place with just one way of thinking.

何が日本にとって、世界にとって正義か
あらゆる角度から追究すると決めた

疑問、違和感は深まるばかり。「当たり前」と思っている価値観は正しいとは限らない。ああ、もっと世界のこと、日本のこと、社会や教育のことを学ばなければ！ちょうど帰国後の日本は新型コロナが蔓延。リモート授業に切り替わったため、通学に要した往復4時間分を有効に使える。これはチャンスだと思った。中・高教員免許に加えて小学校教員免許取得の勉強※2にも取り組んだ。「SGP※3」では、留学前よりも英語の勉強に力を入れた。現在の目標は、大学院に進んで研究職につき、国の政策や国際支援に関わる人材になることだ。もしかしたら正義の正解はないのかもしれない。それでも私は考え続けることをやめないでいたい。

※1 インドのコルカタにある女学校。富裕層の子ども50%、ストリートの子ども50%で構成されており、ストリートの子どもたちは無償で教育を受けている。上級生が農村部へ出向いて出張授業を行う取組みも行われている。
※2 神戸親和女子大学との提携による「小学校教諭一種免許状取得プログラム」があります。
※3 SGP（スーパーグローバルプログラム）は、交換留学をめざす学生の英語力を徹底的に鍛え上げる桃山学院大学の特別奨励プログラム。

Do you know “BD脳”? What is “BD脳”?

Interview

ビジネスデザイン学部ビジネスデザイン学科 1年次

田中麗愛 さん

ヤバい。BD脳。

小さな発見が

アイデアにつながる！

この1年間、企業に提出したビジネスアイデアは32件。ニッチな業界から、誰もが知っている大企業まで、その対象商品は本当に多彩。まだまだ甘くて、到底採用されそうにないけれど、「独創的」と評価してもらえた成功体験を糧に、2年次からもどんどん挑戦するつもり。

BD（ビジネスデザイン学部）の仲間は、好奇心の塊。ちょっとでも新しいモノを見つけたら、何でも確かめに行く。季節限定のドリンク、新しい商品、変わったスポット。そこにはきっと、何かビジネスアイデアのヒントが隠されているはず。そんな貪欲な思考が当たり前になった今、仲間たちと「これってBD脳だよね」って笑い合う。とにかく、何でも経験する。とにかく、何でも考えてみる。ただ考えるだけでなく、顧客が求めているのは何か。ペルソナは誰か。

そんな深い部分まで考えて、考えて、企画を出し続けることが、筋トレみたいに効いてくる。机上の空論ではなく、実際の企業担当者が、真剣に私たちと向き合い、批評をしてくれる。そんな贅沢な実践経験は、きっとほかでは味わえない。

コロナ禍だって、ポジティブに。ネガティブになったって、何も生まれない。そんな、“これまでとは違う日常”の楽しみ方や学びを求めることができるのも、BDならではかもしれない。そんな“BD脳”を引っ提げて、いつか必ず、大反響のテーマパークイベントを創ってみせる。

普通からの脱却

自分のカタチ

明日の、未来の
自分は何をする？

表現者を支えられるビジネスをつくること。

「バーチャルアーティストのライブに、現地で投げ銭できないか？」そんな想いから生まれた、ライブを演出できるサイリウムと課金アプリを連動させたビジネスモデル。思いついてから1ケ月、まずは5Gを活用したプランを構築、その案をさらに半年かけてブラッシュアップした。

「絶対に思いつかない発想」「異質」――

ビジネスアイデアコンテスト※でそう評価され、受賞できたのが不思議だ。だって、ただ自分の好きなことを突き詰めただけなのだから。

いろんなことを“思い続けるだけ”ではなく、実行する。その原動力は、ビジネスデザイン学部の環境にあると思う。

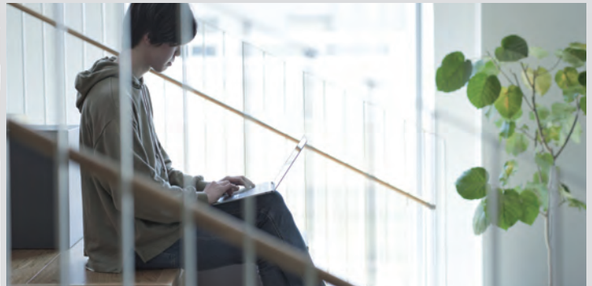
もし、大きな教室で大人数の学生たちとともに講義を聞くようなスタイルの大学生活だったなら、絶対に手を挙げることはないし、その他大勢の中に埋もれていたはずだ。でも、受け身じゃいられないこの環境のおかげで、僕のコミュ障なマインドが変わった。話すのが苦手なのに、人前で発表をし、数え切れないほどのアイデアを出しまくらないといけない。社会人として身につけるべきスキルが、今回のビジネスアイデアコンテスト受賞によって、必然的に身についていたんだ、っていう実感がある。

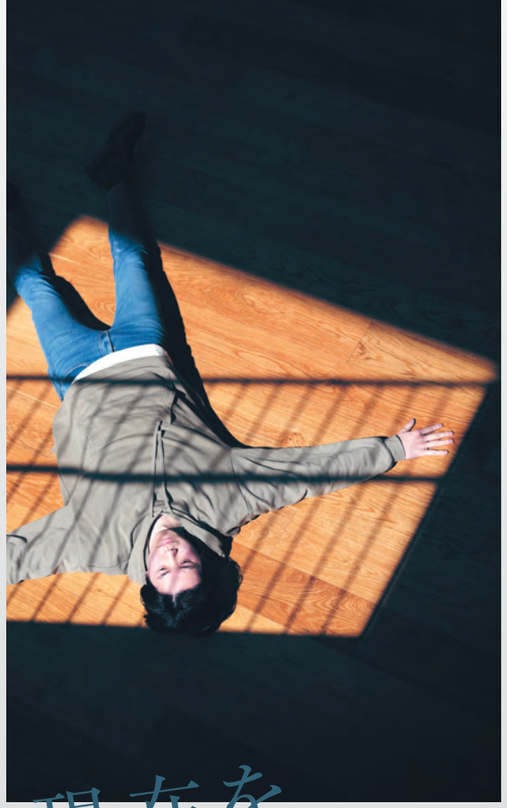
推しのアーティストたちが活躍することで、自分が輝ける世界がほしい。ないなら、自分でつくっていけばいい。

このビジネスをカタチにするために、今はただ、前に進むだけだ。

僕に、就職という概念はない。

※「大阪起業家グローイングアップ　U－30 起業アイデア部門」





現在をオモシロく

Interview

ビジネスデザイン学部ビジネスデザイン学科 3年次
川口大地さん

自分の拠点

臨場感のある瞬間を逃さない

Interview

国際教養学部
英語・国際文化学科 2年次
岡田 洋之佑 さん

5歳からサッカーを始め、プロ選手を目指すことが生きがいだった。高校は推薦を受け、大阪から離れて島根の強豪校へ。しかし現実は厳しく大きな挫折。やけにもなった。一体この先、僕にどんな未来があるというんだ…。その「侮しさ」が僕を奮い立たせる。サッカーに注いできた熱量を、大嫌いだった勉強に注いでみようか。趣味の登山やハイキングしている時、環境問題に興味をもったことを思い出す。それだ！心に火がついた。
桃大に入学し、まずは「自分に武器を」の思いで多くの資格を取得。そして、環境先進国であるドイツへ約1年間留学することを決めた。現在、英語の勉強に猛烈取組中だ。留学先でアピールできる教養も身につけたい。サッカー部の友人が、「他学部に環境問題に詳しい先生がいる」と教えてくれた。その日のうちに、単位にならないのは承知の上で「授業を受けさせてほしい」と先生に直談判した。先生の教えは大きな刺激になった。

僕の一日にムダな時間はない。毎日朝5時起床。1時間半の通学電車の中ではPodcastで英国のBBCのニュースを聞いたり、環境問題の書籍を読む。通学費軽減のためJR和泉府中駅から約30分かけて自転車で大学へ。8時頃大学に到着。午前は頭が冴えているので授業がない日は英会話や簿記の勉強に没頭。午後からは、自分が立ち上げた環境問題に取り組むサークルの事務作業や、散歩がてらに図書館へ。夕方からはバイトに行くか、今日決めた課題に取り組む。帰路や帰宅後は主に読書。3日に1冊のペースで読み進めている。
頑張った過程だけに満足しない強い気持ちや、作戦を立てて鍛錬を重ねる力を形成できたのはサッカーのおかげだと日々感じているし自信にもなっている。今は留学先でどんな学びを得られるか楽しみでしかない。環境先進国ドイツで環境問題についてしっかりと学び、世界や地球環境を守れる自分になりたい。

ムダな時間なんてない　すべてが今、未来の自分につながる。

毎日、自分アップデート。

Interview

経営学部 経営学科 4年次
瀧野 美桜 さん

1年次に受けた大学入門セミナー。教壇に立っているのは先生ではなく、先輩だった。エルダー※っていうらしい。とにかくカッコよかった。講義内容は、「これからの4年間をスケジューリングしてみよう」。なんか、おもしろそう。
ありきたりの4年間を送るより、楽しい想い出がほしい。そんな理由で、エルダーに応募した。いざ、自分がなってみると、イメージしていたより大変。1年生に授業を提供するっていうけれど、具体的にはどうやって？悩み抜いて企画を立てたり。意見をまとめたり。夜まで集まったり。特に、コロナ禍に突入してからは、初めての経験ばかり。でも、メンバーは向上心の塊みたいな人ばかり。
外部講師を招いた研修会も、自分たちだけでゼロから創り上げなくちゃならない。けれど、情熱的なメンバーと一緒にいると「負けていられないな」って思えて、必然的に何でも積極的になれた。日々、「目的→達成」これの繰り返し。まるで毎日、自分をアップデートしているみたい。更新するごとに広がった視野。そして、未知の世界にチャレンジしよう！と思える自分になれた。だからこの先も自信をもって進める。とりあえず、やってみよう。そこから絶対、何かが得られるはず。次のステージは、就職先企業初の女性営業職。卒業後もずっと「やってみよう」を、ひとつずつ叶えにいく。

負けてられないな。
自分を更新しつづける。

なんで？なんで？なんで？

あ、自分の人生か。
幸せの本質。

Interview

経営学部 経営学科 4年次
真野 壮生 さん

「なぜ、この課題を出されたかを考えてみろ」そう、先生から何度もいわれた。なんで？そんなこと、これまで考えたこともなかった。エルダーになってから、その「なんで」を考えるようになった。なんで、今、それをするんだろう。なんで、それをすべきなんだろう。この「なんで」にとりつかれるようになると、自然に物事の本質を考えられるようになってきたから不思議だ。
卒論のテーマは「幸せな老後生活とお金の関係性」。ゼミが同じエルダー仲間たちとグループを組み、2,000万円問題※から派生した、その金額への呪縛を考えた。2,000万円をクリアしたら、本当に幸せなのか？それを知るためにリサーチし、幸せの本質を投げかける論文ができあがったと思う。
「もっとこうなってほしい」と、先生に期待されること。「こうなりたい」と、自分で思えること。「こうしたい」と、切望する仲間がいること。その一つひとつに向き合って、クリアして、できるようになった。その感覚が嬉しくて。この幸福が、「自分の人生をこうしたい」って思える原動力になった気がする。誰かにいわれたから。みんながそうだから。これまでは、それに無意識に乗っかってきた。大学で、ようやく自分の人生を“自分ごと”として考えられるようになったと思う。
なんで？　なんで？　なんで？　そう考え続けることで得たこの幸せに、これからは自分のストーリーを乗っけていきたい。

※エルダー（システム）：上級生（エルダー）が下級生の勉強や課外活動、大学生活をサポートする経営学部独自の制度　※2019年、金融庁の金融審議会「市場ワーキング・グループ」の資産により、老後30年間で約2,000万円が必要になると試算され、不安が広がった問題のこと

桃山学院大学は、挑戦するあなたと共にすすみます。

何事も不透明なこの時代に、どんな困難にも挫けず、誇り高く常に前を向いて自分の道を進む若者がいます。
他者のために、自分のために道を切り拓き、強い意志を持ち果敢に挑戦をする人がいます。様々な課題に立ち向かい、自ら考え、実践する。
桃山学院大学は皆さんにそのような学びを提供し、ともに成長することを目指していきます。

桃山学院大学 学長

中野瑞彦

※ この冊子は、2022年3月現在に確認できる内容に基づいて作成しています。
学生の学年は2021年度のものです。